
こんな日も悪くない

絶氷のシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな日も悪くない

【コード】

N0858T

【作者名】

絶氷のシア

【あらすじ】

今回は唯ちゃん視点に挑戦してみました！読んでいただけたら嬉しいです

カチツ…コチツ…カチツ…コチツ…。

静かな私の部屋のなかで響くのは枕元にある目覚まし時計が時間を刻む音。

「…うん」

ベッドの中で目覚めた私はただ天井を見つめてる。

あまりの心地よさに体を起こすのも戸惑う。

二度寝…しようかな。

でもそんなことをするわけにはいかないのです。

なぜって今日も私は学校に行かなきゃいけないんだから。

私って偉いなあ。

そう思っていたらふと違和感を感じる。

あれ？

目覚まし鳴ったっけ？

慌ててベッドに横たえていた体を起こし目覚まし時計を掴んで時間を確認する。

示していた時間は…。

「8時っ!？」

アラームをセットし忘れていたのか、目覚まし時計は時間を表示することしかせず、目を覚まさせる仕事は放棄したらしい。

「ち…遅刻っ!！」

私は急いで飛び起きると壁に掛けてある制服を無造作にはずして着替え始める。

いつもなら憂が起こしてくれるはずなんだけれど。

私はそんなにおきなかったのかな？

そんなことを考えている間も時間は待つてはくれない。

髪はセットしている時間がないから学校に行つてムギちゃんか誰かに整えてもらおう。

着替え終わった私は急いで一階へと降りる。

朝ごはんも食べられるような余裕もなく私は目覚まし時計をセットし忘れた昨日の自分を恨めしく思いながら玄関に走る。

靴を持ち玄関に腰を下ろして右足の靴を履き終え、左足に移ろうとしたとき。

「あっ!!」

忘れ物をしていたのを思い出した。

慌てて右足の靴を脱ぎ、二階の自分の部屋へとかけ戻る。

私の忘れ物。

それは…。

「忘れてごめんね…ギータ」

それはいつも軽音部で私が助けてもらつてる自慢の相棒ギータ。たまーに忘れることもあるけれど、今日は思い出せてよかった。急いでギータを背負い、再び玄関に向かって階段を駆け降りる。

今度こそ両足の靴を履き終え、玄関の扉を開ける。

外に飛び出そうとする私。

けれどもまた忘れ物をしたのを思い出した。

「いけないいけない。また忘れるとこだった」

独り言を呟いてから私は玄関の扉を開け…

「いつてきまーすっ!!」

毎朝の日課を終えて今度こそ私は家を飛び出した。

タツ…タツ…タツ…タツ…

いつもの登校道を急いで駆け抜けていく。

足も遅いし体力も無いけれど、走らないと遅刻を確定になっちゃう。

ギータを背負っていることもあつて走る速度は遅く、体力もその分

減っていく気がする。

「はあ…はあ…」

家を出てからしばらく経ち、息が切れてきた。

それでも今私のいる場所は約半分を過ぎたところ。

まだまだ走る速度を緩める訳にはいかないわけで。

「わあっ！！」

疲れて目を瞑って走っていたせいで、交差点から出てきた人と頭がぶつかり合う。

「ごめんなさいっ！！」

ぶつかった頭をおさえながら相手と同時に謝る。

でもこの声どこかで聞いたことあるような…。

そう思っ顔を上げ、相手を見る。

するとそこにいたのは…

「りっちゃんっ！？」

「唯っ！？」

私のいる軽音部の友達にして部長の田井中律。

りっちゃんは私と同じく髪もボサボサでとっても急いでるみたいだった。

「りっちゃんも寝坊？」

「ち、違わい！ただ起きるのが遅かったただけだい！」

「りっちゃん、人はそれを寝坊と呼ぶんだよ」

どうやらりっちゃんも寝坊の様子。

ってそんなことをしてる場合じゃなかった。

「りっちゃん！早くいかないと！」

「え？あつ、おう！」

私たちは頷き合い、再び走り出す。

でも走るにつれてりっちゃんとの差がどんどん広がっていく。

「唯、早くっ！」

「わ、わかつてるけどっ！」

無理もないと思う。

だってりっちゃんと私には大きな違いがある。

りっちゃんの荷物はバッグのみ。

私はというとバッグの他に相棒ギータ。

しかもギータはギターの種類の中でも重い部類に入る。

誰だっ！！

このギター買うつて言ったのっ！！

私だっ！！

「くっ！」

そんなことを考えてる間にもりっちゃんとの差は開く一方。

なんとかして追い付こうとするけれど、荷物が重くてとてもじゃないけどついていけない。

「りっちゃんっ！私のことはいいから先に行つてっ！」

「はあっ!？」

「だってついていけないもん！りっちゃんだけでも…」

そこまで言うとな方を走っていたりっちゃんが急に立ち止まり、私の方へと向かつて歩いてくる。

「りっちゃん？」

「そんなことできるわけないだろっ！ほら行くぞっ！」

「わあっ!？」

急に手を繋がれ、りっちゃんに引つ張られて無理矢理走る速度を上げられてしまう。

私はびっくりして走り出した時に転びそうになったけど、なんとか体制を立て直して足を動かす。

けれど…

「りっちゃん早いよーっ！」

「仕方がないだろ！こうでもしないと間に合わねーよ！」

仰るとおりで。

そのままりっちゃんに引かれる状態で私たちは登校道を駆け抜けて

いく。

するとようやく学校が見えてきた。

これでやっとひと安心、だと思っただけ。

「げっ！校門閉まってる！」

「嘘っ！？」

りっちゃんの言葉に私は愕然としてしまう。

校門がしまってるなんてありっ！？

「ど、どうしようりっちゃん！？」

「……………」

「りっちゃん？」

校門に両手を添え、黙ったままのりっちゃんを見て不安になる。

どうしよう？

このままでは遅刻確定どころかお休み扱いになっちゃう。

そのとき。

「はははははっ！」

「っ！？」

急に大声で笑いだしたりっちゃんに私はびっくりして飛び上がってしまっ。

「び、びっくりしたー！」

「いやー悪い悪い。けどな唯。こんなところで諦めるようなあたしじゃないぜ！」

私に親指をたてて格好つけるりっちゃん。

なにか思い付いたのかな？

「じゃあどうするの？」

「ここを使うんだよ！」

りっちゃんはさっきたてた親指で自分の頭をしめす。

「え、さっき使ったじゃん！」

「あほう！外側じゃねー！ていうかさっきぶつただけじゃねーか

！あたしは中身を使えって言ってんだよ！」

あーなるほど。

言われて私は自分にできるかぎり頭の中身を回転させる。
はっ！

まさかつ！

「頭突きで塀を突き破るんだねりっちゃん！」

「はいはい。んなこと言ってるど置いてくぞー」

「ああん、待ってよー！」

私の発想は間違ってたと思うんだけどなー。

進みだしたりっちゃんについていくと、どうやら裏口に行くみたい。
裏口には校門と同じような大きな門がある。

なにをするんだろっ？

興味深々に見ていた私を尻目に、りっちゃんは行動につつまる。

「よっと」

がらがらがら。

横開きの裏門をいとも簡単にひらくりっちゃん。

え？

でもなんで？

不思議そうにしていた私を見てりっちゃんは得意気に話す。

「実はな、正門と違って裏門は先生たちが使うことが多いから鍵が
しまってることは滅多にないんだよ」

こういうところは抜け目がないと思う。

さすが軽音部部长。

部長はこうでなくちゃっ！

そんなことはさておき。

「行こう！唯！」

「うん！」

私たちは三度、目的地へと走り出す。

目指すは私たちの教室。

でもまた私とりっちゃんの距離が離れてしまっ。

するとりっちゃんは手を差しのべてくれる。

私は頷き、りっちゃんの手を勢いよくとった。

階段を駆け上がり、目的の階まで到達する。

「はあ…はあ…」

走り続けていたせいで私たちはもう息も絶え絶えでも息を整えている暇はない。

私たちはラストスパートで走ってはいけない廊下を駆け抜ける。

そして私とりつちゃんの教室の扉の前までたどり着いた。

長い長い道のりがやっと終わりを告げた。

私たちは二人で同時に扉に手をかける。

「うん！」

互いを見て頷き合う。

正確な時間は見ていないけれど。

正門が閉まっていた時点で私たちは遅刻確定。

けれど私は一人じゃなかった。

隣にはりつちゃんがいる。

二人ならさわちゃんに怒られたって怖くない！！

私たちは勢いよく教室の扉を開いた。

「すみません！遅刻しました！」

開けたと同時に私たちは頭を下げ、謝罪の言葉を投げかける。

なんだか朝から謝ってばかりだな、と思いつつ私はその姿勢を保っていた。

しーん…

あれ？

おかしいな。

全然言葉が帰ってこない。

違和感を感じて頭を上げ、教室を見渡してみる。

すると教室の中には誰もいなかった。

隣を見るとりつちゃんも私と同じく顔を上げ、呆然としているみただった。

「りつちゃん」

「なんだ？」

「…今日の一時限目は移動教室だったっけ？」

「…違かったと思う。つーか私たちのクラスには一時限目に移動教室の日なんかあったか？」

「言われてみると確かに私たちのクラスには一時限目が移動教室の授業は存在しない。」

「とゆーことはこの状況はいつたい…？」

「あら？ゆいちゃんにりっちゃん」

「混乱していた私たちの耳に入ってきたのは聞き覚えのある声。」

「振り返ると私たちの担任、山中さわ子ことさわちゃんがいつもと変わらぬ表情でそこにいた。」

「「おはようさわちゃん」」

「はい、おはよう」

「とりあえず社交事例である朝の挨拶を終えて私たちは疑問を投げ掛ける。」

「ねえねえさわちゃん、他のみんなは？」

「他のみんなって？」

「クラスのみんなだよ」

「そう、私たちより先に来ているはずのクラスメイトたちの姿が一人も見当たらない。」

「こんな状況はおかしすぎる。」

「けれどもさわちゃんは困ったような表情をするばかり。」

「するとさわちゃんが私たちに疑問をぶつける。」

「あなたたち、今日何曜日だかわかる？」

「なんでそんなことを聞くんだらうと私とりっちゃんは顔を見合わせた。」

「けれど質問にはきちんと答えなければ。」

「今日は金曜日のはずでしょ？」

「私が答えると、さわちゃんはやっぱりといった表情をして自分のポケットから携帯を取りだし私たちに見せた。」

「するとそこに表示してあったのは…」

「今日は土曜日よ」
「がーんっ!!」

ま、まさかよりによつて金曜と土曜を間違えるなんて…
私とりっちゃんは悲しさのあまり膝をついてしまつ。

「うう…あたしたちは土曜に早起きしてまでなにやっつてんだろつな…」

「そうだね…でもね」

そこで私は顔を上げ、りっちゃんを見た。

「楽しかったよね」

そう…走っているときは気づかなかつたけれど今になって考えるとつても楽しかった。

同意を求めてりっちゃんをみる。

「…そうだな。楽しかったな」

りっちゃんは笑つてくれた。

私もりっちゃんに笑い返す。

そんなやりとりをさわちゃんは暖かく見守つていてくれた。

「二人ともこれからどうするの?」

そうだった。

さわちゃんに言われて私たちはこれから何をしようと思案する。
すると…

ぐ〜

可愛い音が二つ鳴り響く。

そうだった朝ごはん食べてないんだつた。

りっちゃんも同じらしく、自分のお腹を軽くおさえていた。

そんな私たちを見て、さわちゃんはやれやれといった感じで肩を竦めた。

「ちよつと待つて。あと少して仕事が終わるから、終わつたらご飯に連れていってあげる」

「えっ!?!いいのっ!?!」

「さわちゃんのおごりっ!?!」

思いきり頭をチヨップされてるりっちゃん。
やっぱり自分で払うのか。

「お店はファーストフードでいいかしら？」

「もっちゃん」

さすがさわちゃん、学生のお財布に優しいファーストフードをチヨイスするとは…

職員室に戻るさわちゃんについていくりっちゃんと私。

寝覚めは悪かったけど、こんな一日も悪くない。

そんな日でした

そのころ平沢家。

「お姉ちゃんどこ行ったんだらうっ？」

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0858t/>

こんな日も悪くない

2011年6月3日05時07分発行